

小児のインフルエンザ感染症の重症合併症と死亡

— 新型と関連して —

いずみ 泉 のぶ お 夫

キーワード：重症インフルエンザ感染症，小児，細菌共感染，
急性呼吸窮迫症候群（ARDS），新型インフルエンザ

要 旨

米国の報告から季節性インフルエンザ（Flu）の受診者当りの死亡率は0～5ヶ月～0.02%，6ヶ月～1歳，～0.004%，2～4歳，0.002%，5～11歳，～0.001%，～49歳，0.005%，≥65歳2%，全体0.14%と概算した。新型Fluの死亡率は当初のメキシコを除くと0.1～0.2%で，高齢罹患が少なく弱毒性とは言い難い。メキシコの当初の高死亡率等から新型Fluの空気感染（気道深部での感染）時の危険性を考えた。季節性Fluの小児死亡は稀だが半数は生来健康な児におこる。日本では脳症が注目されるがウイルス性肺炎，細菌（特にMRSA）共感染による肺炎や敗血症などもあり，多くは急激に進行しARDSの合併もある。基礎疾患では慢性肺疾患や心疾患などに加え，神経筋疾患の重要性が指摘されている。

はじめに

新型のインフルエンザ（以下Flu）が世界に拡大した。毒性が主に死亡率より云々されるが，前世紀のパンデミックの初相と同様，新型Fluの死亡者の主体は最も死亡率の小さい思春期から四十代である¹⁾。交叉反応抗体の関与によるとの考えがあるが未解明の点が多い。

季節性Fluでは死亡の90%は65歳以上が占め

る²⁾。毒性の判断は季節性Fluの年齢層別，リスク因子の有無別の重症罹患・死亡の実態を理解したうえで比較すべきである。その理解は季節性Flu対策にも必要である。

日本の小児Fluの死亡原因は脳症が特異に多く論文も数多い^{3,4)}。米国では脳症も認知されてはきたが，肺炎（おそらくウイルス性）が多く，ARDS合併や細菌共感染の増加も指摘される。本稿では脳症の他に焦点を当て小児の季節性Flu死亡についてまとめた。合せて，新型Fluのメキシコでの5月までの高死亡率に照らし考察した。

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科
連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613